

セント・オルバンズのクリスマス

津 島 克 子

セント・オルバンズはロンドンのキングス・クロス駅から急行で北へ20分程のところにある古代から続く歴史ある街であり、49年から425年までローマに支配されていた。その時代の遺跡も残っており、Verulamium Museumでは当時のモザイクの床や発掘品などが展示してあり、何世紀も以前の生活をかいま見ることが出来る。

昔ローマ人がロンドンから北へ向かう途中に、セント・オルバンズに宿泊したため、沢山のインやパブができた。インにはコーチゲートと呼ばれる馬車が通れる間口の広い門があり、その中庭で馬車を休めることができた。馬車を休め、人間はパブにくり出て旅の疲れを癒した。現在も街の中には沢山のパブが残っており、Fishpool Streetというかつてのロンドンから北へ向かう時に通った街のメインストリートにはチューダースタイルと呼ばれる白壁にティンバーフレームのインがコーチゲートもそのままに残っている。

また現在のメインストリートであるSt. Peters Streetでは中世から伝わるマーケットが昔は土曜日だけであったが、現在は水曜と土曜の週2回開かれ、主に日用品が売られている。クリスマスの季節になると樅の木やミソト、クリスマスツリーの飾りものがそれに加わる。サンタクロースの格好をした人がベルをならしながら募金を募っていたり、'Christmas tree! Mistletoe!'と叫んでいる様はまるで日本の年末の門松売りと同じ風景である。

街の名前は英国内で303年にローマ兵から最初のクリスチャン殉教者と

なったSt. Albanに由来している。

I. Christmas (クリスマス降誕祭・12月25日～1月6日)

英国の冬は寒くて暗い。朝も8時を過ぎないと明るくならず、夕方は3時過ぎると暗くなり始める。霧や雨も多く特に12月のことを‘pale December’ ‘bleak December’ と言われる程である。

しかし、12月はキリスト教徒にとって、一年で一番重要かつ最大の祭事であるクリスマスの月でもある。街の様子は天候とは反対に、通りやそれぞれの店でクリスマス用ライトの飾り付けをして明るく、楽しい雰囲気になる。人々も毎日クリスマスの準備に追われ忙しそうに買い物に走り廻っている。普段は駐車できない空地もその時だけは‘Christmas Park’ と表示が出て駐車できるようになる。

12月に入ると、徐々にクリスマスカードが届き始め、それを暖炉の上や部屋の壁に飾っていく。(何十枚と届くが不思議と同じカードがない。)そして毎日のようにプレゼントの包装に忙しくなる。10日も過ぎると、何処の家でもツリーが飾られ窓には豆電球などで彩られる。

また、街では教会や広場などで‘Carol Service’が行われる。私は20日の夜8時から行われた‘Civic Carol Service’に参加した。セント・オルバンズの市長主催のこのServiceは満天の星空の下、深深と冷え込む中、数曲のCarolを皆で楽しんだ。

クリスマスイブの24日も街の中は最後の買物で忙しい。そしてクリスマスのミサはこの夜から始まる。普段のミサには行かなくても、この日だけは行くという人が多い。日本で除夜の鐘を聞きに夜中からお寺に行くように、24日の夜10時頃から各教会で‘Midnight Mass’が行われ12時過ぎに終わる。教会の中にはクリスマスツリーより重要な‘crib’と呼ばれる、馬小屋でのキリスト誕生の時を再現した人形が飾られている。

人々は日本のような全くキリスト教とは関係ない馬鹿騒ぎとは違い、

普段遠くにいる家族や親戚が集まりクリスマスディナーやプレゼントの交換を楽しむ。伝統的なクリスマスディナーのメニューはローストターキー・スタッフィング・何種類もの温野菜（何故か芽キャベツが含まれる）・クリスマスプディング・ミンスパイなどである。日本のようなスポンジケーキにクリームで飾ったケーキはない。また日本のおせち料理が三が日続くように、大きなローストターキーは品を変え形を変え数日の間食卓に登場する。

クリスマスツリーの下に山のように積まれたプレゼントは全員が揃ったところで、家族の中で一番年下の者が皆に一つずつ渡す。一人が一個ではなく数個から十個以上貰う場合もあるので、最初は一つずつに歓声を挙げていても全員が全部のプレゼントを開け終わるのに2・3時間かかることがあり皆疲れてくる。私が伺った家は12時からクリスマスディナーが始まり、3時からエリザベス女王のメッセージを聞き、プレゼントを開け始め、それが終わったのは6時半を過ぎていた。そして解散となり静かな日々に戻る。

しかし、この日でクリスマスが終わったわけではなく、ツリーや飾り付けも1月6日の朝までそのままに置く。そして街で友人に会うと年が明けても‘Merry Christmas’と挨拶を交わす。

II. Twelfth Night (十二夜・1月5, 6日)

クリスマスはEpiphany即ち1月6日で終わる。この日は東方の三博士がベツレヘムに生まれたキリストのもとに到着した日とされている。

1582年にヨーロッパのカソリック教徒がグレゴリオ歴 (Gregorian Calendar) を取り入れた時、英国では今と同じようにヨーロッパの他の国々と同じにすることを好まず、昔ながらのユリウス歴 (Julian Calendar) を引き続き使った。結局18世紀の半ばまでロンドンパリより12日間日数が早く進んでしまったということになる。即ち、ヨーロッパでは、キ

リスト降誕祭は十二夜に相当する1月6日に祝われていた。1751年、他の国と同じように英国でもグレゴリオ暦を使うようにするため、9月2日が9月14日になるということを宣言するカレンダー条例が通った。これによって12月25日にクリスマスを祝うこととなった。この改革はあまり評判が良くなく、ある地域では「政府が自分達の一生から12日間を取り上げた」と本気と考える人たちが、暴動を起こしたり、デモに参加したりした。

1月6日（十二夜）はながい間‘Old Christmas’と呼ばれ続け、それまでと同じに祝っていた。お祝いの機会はひとつでも多い方が良いと考えた人々は‘New Christmas’も祝うことにした。これによって、祝祭の日は12月25日から1月6日の12日間に延びた。次第に12月25日の‘New Christmas’の方が祭の中心となっていくが、古い習慣もまた消えることはなかったのである。

1月5日の‘Old Christmas Eve’の伝統行事の一つに‘Wassailing’とこのがある。これは果物の木が来期も豊作であるように祈りを込めて、果物の木の根元にりんご酒をかけて祝いの歌を歌ったり、枝に向かって火薬に火を付けて飛ばして騒ぎ、盛大にお祭の気分を盛り上げた。

またローマ人が英国を占領していた頃は、このクリスマスと同時期に農業神を賛える祭事も行っていた。数々の祝賀行事の最後の日に十二夜の王と女王を選出した。その方法は‘Twelfth Cake’（十二夜のケーキ）にインゲン豆とエンドウ豆を入れて焼き、それを食べた人が選出される。インゲン豆を見つけた男性が王となり、エンドウ豆を見つけた女性が女王となった。女性がインゲン豆を見つけた場合、その女性の夫が王になった。この日は異性の衣装を身に付けることが命じられていて、それがシェイクスピアの戯曲*Twelfth Night, or What You Will*（十二夜）の題名にもなっている。権力の構造を暫くの間冗談でひっくり返そうという「混乱」を楽しんでいたが、こういう行事も18世紀には衰退していっ

た。

III. A Twelfth Night Celebration in Poetry & Prose

このクリスマスの時期にはいたる所で数多くの催し物が行われている。セント・オルバンスでは‘Museum of St. Albans’の100年目を記念して1月6日に詩の朗読会が開かれた。100年前の衣装をまとった3人の‘Poesia’が‘Old Christmas Day’に合った詩を朗読していく。例えば、Robert Herrickの*Twelve Night*, T. S. Eliotの*Journey of the Magi*, John Betjemanの*Christmas*など他にも楽しい詩を含め27篇もの朗読であった。途中‘Was-hail the ancient tradition of drinking the health of friends’という英国の冬には欠かせない香辛料の入った温かい飲み物のMulled Wineを楽しむ時間があった。

IV. Mumming and Panto

クリスマスの伝統的な行事の一つとして‘Mumming Plays’と‘Panto’がある。両方とも幾つの特徴や決まり事があり、Mummingの方は仮面を付け、派手な衣装をまとい無言の物まね劇のことだった。昔から宮廷でもクリスマスの時期に演じられていたが、仮面や仮装をし役者に扮装して殺人や悪事が頻繁に起こり、1511年に禁止する法令が発令された。そのため、貴族の間ではMummingは消えていったが、民衆の間では違った意味で生き残っていった。それは街中で行うと観客から御祝儀をもらうことが出来たためであった。それによって「劇」として残り現在も演じられている。

セント・オルバンスで催されたのは*St. George & the Dragon*だった。衣装を付けた役者が街の中を歩いて会場となるタウン・ホールの前に現われた。口上役の役者が一列に並んだ役者を呼び出し、呼ばれた役者は一步前に歩み出て自己紹介する。そして劇が始まると直ぐに戦いの場面

となり、どちらかが倒れる。そこに医者が登場し命を蘇らせる。その後
は物語とは関係ない役者が登場し観客に受ける話しをする。全くの喜劇
で大人も子供も楽しんだ。劇が終わると役者が帽子を持って観客の中を
廻り祝儀を集める。というように伝統の決まり通りに進められた。

ここでいう‘Pantomime’は無言劇ではなく、‘Christmas Pantomime’
といいクリスマスのお伽芝居のことを言う。これにも決まり事がある。
まず主役は男性が女性役をし女性が男性役をする。大抵女性役は太った
女性になる。そして悪人と善人がいること。観客も黙って見ているので
はなく、悪人が現われるとやじを飛ばしからかう。役者も観客に向かっ
て声をかけたりするのでそれに答えなくてはならない。そして必ず歌を
歌う。全て舞台と観客が一体となって劇を楽しむことになる。内容は伝
統的には*A Christmas Carol*, *The Snow Queen*, *Arabian Nights*,
*Cinderella*などで、早くから今年は何を見るのかを決めてチケットを購入
する。私が見たのは*Beauty and the Beast*でこれは比較的新しいものだ
そう。決まり事を知らなかった私は最初、子供も大人も観客のあまり
の賑やかさに驚いた。しかし最後には皆と一緒に歌を歌いやじを飛ばし、
舞台の中に入り込んだような気がして大変楽しむ事ができた。

セント・オルバンズは英国のどこにでもあるような小さな町だが、ク
リスマスという時期もあわせて良かったのであろうが、古代ローマ時代
から現在に至るまでの英国の全てを縮図としてみることが出来る所のよ
うだ。

ただのお祭騒ぎに終わらない、本当のクリスマスをみる事ができた
ことは、素晴らしい経験だった。

Dickensの*Christmas Carol*やBurnettの*Little Lord Fauntleroy*では主
人も使用人も一緒になってクリスマスディナーを楽しんで終わる。物語
の中では、クリスマスには頑なな人の心も変える力がある。そしてキリ

スト降誕祭というキリスト教の教えをベースに、いろいろな昔からの伝統や習慣を守りながら代々に伝わる素晴らしい祭事だと思った。

参考資料

- イギリス祭事・民族事典 チャールズ・カイトリー著
澁谷 勉訳
大修館書店 1992年
- イギリス文学の歴史 櫻庭信之著
大修館書店 1980年
- ランダムハウス英和大辞典第2版 小学館 1994年
- Poesia-At. Albans City Museum資料 1999年